



学会報告

Keystone Symposia “Chromatin Mechanisms and Cell Physiology”

大阪大学 微生物病研究所 上田 潤

2014年3月23~28日までドイツ、オーベルストドルフで開催された Keystone Symposia “Chromatin Mechanisms and Cell Physiology”に参加しました。今回の参加者は合計150名程度（日本からの参加者は筆者を含めて9名）と、Keystoneとしては規模が小さかったものの、この分野の研究者がスキージャンプの開催地として有名なオーベルストドルフに集結しました。5日間にわたって、クロマチン、エピジェネティクスに関わる最新の知見が紹介されました（口頭発表47題、ポスター発表91題）。

エピジェネティック因子の生化学、遺伝学で名を馳せた功的な研究者の方々が、多少ぎこちないながらも ChIP-seq 解析のデータの話をする姿を見て、次世代シーケンサーを用いた解析がすっかりエピジェネティクス研究のスタンダードになったことを実感しました。一方、ビッグデータを扱った話題が多い中、大学院生の Kathryn Malecek さん（シカゴ大の Alex Ruthenburg 研）が TED ばりのトークで、カラムを使った昔ながらの蛋白質精製法で、5-ハイドロキシメチルシトシンと5-ホルミル化シトシンに結合する蛋白質を精製したという話はとても強く印象に残りました（残念ながら蛋白質名は明かされませんでした）。エピジェネティクスに関わる役者はだいたい出揃ったかと思っておりましたが、まだまだ新しい役者が加わりそうな予感がしました。

Keystone と言えばスキーですが、今回スキーは遠慮して、学会主催のハイキングに参加しました。オーベルストドルフの周りの小高い丘を4時間ほど歩いたのですが、その道中に参加者の方々と話す機会がありました。ドイツ開催ということもあって、多くの方はヨーロッパから来られていましたが、大学院生を含む参加者の多くが一人で参加されていることに驚きました。一人で参加すると必然的に周りの人と話す機会が増え、学会期間中に仲良くなっていく様子でした。国際学

会では日本人はとかく集まってしまいがちですが、是非一人で参加して、多くの学会参加者と交流することをお勧めします。



写真1：会場での夕食会の様子。会議中に知り合ったシンガポールの南洋理工大学の Eugene さん（左）と筆者（右）。

今回がドイツで最初の Keystone Symposia だったようで、オーガナイザーの一人の Jenuwein 博士が、学生の発表に対して積極的に質問したり、参加者の様子を気遣ったりしている姿がとても印象に残りました。終わってみれば、とてもスムーズで魅力的な会議だったように思います。また、トークをした研究者の多くが、ユーモアたっぷりに自身の研究を楽しそうに話をする姿を見て、どんなに技術が進歩して研究が大規模になっても、サイエンスが個々人の研究者の個性によって形作られているものであることを改めて実感しました。個人的には色々な方との出会いがあったり、自分の研究に対してフィードバックがあったりと、とても有意義な会議でした。機会があればまた是非参加したいと思います。



写真2：シンポジウムが行われた会場（オーベルストドルフ・ハウス）。

情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしく願います。お近くの広報委員（中島欽一、梅澤明弘、角谷徹二、古関明彦、中山潤一各幹事）に気軽にe-mailください。

日本エピジェネティクス研究会事務局

山梨大学大学院医学工学総合研究部
環境遺伝医学講座内
庶務委員長 久保田健夫
担当：岡崎恵美
住所：〒409-3898 山梨県中央市下河東1110
TEL: 055-273-9557 / FAX: 055-237-9561
E-mail: jse-jimukyoku@yamanashi.ac.jp